

早稲田社会科学総合研究 別冊「2018年度 学生論文集」

# ヒュームにおける 個別的存在物と存在の観念の同一性

永 井 啓 太

デイヴィッド・ヒューム（1711-1776）は、主著『人間本性論』（1739-1740）のなかで、外的な存在についてかなり多くの章を割いて論じている。しかし、それを論ずる前にヒュームは、存在そのもの、すなわち、一般的に「有ること」の観念がどのようなものかについても論じる。曰く、すべての存在するものに存在の観念はあり、存在の観念と存在するものは不可分であるために、それら二つは同一であるということが帰結する。しかし、このような議論には、以下の二つの反論が提起されるように思われる。

第一に、存在の観念と存在するものが同一であり、この同一性がすべての存在するものにおいて成り立つとすると、個々の存在するものそれぞれが存在の観念と同一であることになる。しかし、そうすると、推移律（ $A = C$  かつ  $B = C$  ならば  $A = B$ ）により、個々の存在するものすべてが同一になってしまうように思われる。

第二に、すべての存在において存在するものと存在の観念が同一であると言っても、結局は個々の存在するものを一つ一つ調べていくことしかできない。個々の存在するものを一つ一ついくら観察したところで、個々の存在するものは「有ること」そのものの観念ではなく「それぞれの存在のみが有ること」の観念しか持たず、一般的に「有ること」の観念は観察されないように思われる。

本論文では、このような反論に応答し、ヒュームの議論に整合的な説明を与えることを目指す。

本論文は以下の流れで進む。まず第1節でヒュームの議論における同一というものがどういうものか論じた上で、第2節ではヒューム自身が存在の観念を存在するものと同一とする筋道を論じる。第3節では、存在の観念と存在するものが同一というヒュームの説に対して挙げられる上記の二つの反論を詳述する。第4節では、これらの反論に対して、「一般観念」という考え方をを用いて応答し、ヒュームの議論を補強することを試みる。

---

\* 社会科学総合学院 千葉清史教授の指導の下に作成された。

本論文では、テキストとして、ヒュームの著作『人間本性論 第一巻 知性について』（木曾好能訳、法政大学出版局、1995）を使用する。参照の際には、Tと省略した上で、巻数・部数・節番号を記す。例えば、第一巻第一部第七節ならば 1.1.7 と表記する。

## 1 同一性の原理

何かと何かが同一であることを言うためには、まず同一性の原理を解き明かさなければならない。すなわち、あるもの同士が同一であると語る時、我々は同一であるということがどういうことか知っていなければならない。この原理は、T, 1.2.4, pp. 232-233 に「個体化の原理」として説明されている。

我々はいかなる一つの対象をただ観察した場合も、それに同一性を見出すことはできない。すなわち、ある対象がそれ自身と同じであると考えてみても、その対象はもともと一つであるから、ここでの同じであるというのはその対象はその対象であるということしか示すことができない。例えば、1が1と同じであると言ったとしても、1が1であり1と同じであることは、1という数を挙げた時点ですでに含意されていなくてはならない。すなわち、1が1と同じであると言っても、1であるということしか示せていないことになるのである。以上より、我々が一つの対象をただ観察した場合、その対象がそれ自身と同じであるということを考えるのは必要がない行いであり、同一性というものも想定される必要がない性質であることが帰結してしまうように思われる。したがって、同一性がそもそも有用な性質たりうるためには、それは複数の何かに関して成り立つものと考えられる必要がある。しかし、複数の別個のものは、別個であるという前提があるため、そもそも同一であるということが言えなくなってしまう。だとすれば、同一性が成り立つとき、そこには複数である側面とただ一つである側面の両方がなければならない。

ヒュームの議論の中では、この複数である側面は数多性、一つである側面は単一性と呼ばれ、一つの対象が変化しないのを観察し続けるという例で説明されている。

また、同一性の観念は、いくつかのものが別個であることから生まれえないので、単一の対象に数多性を見出すことによって成立する。これは、「単一の対象が、われわれに同一性の観念を与えることが出来るのは、この虚構によるのである」（T, 1.2.4, p. 233）というヒュームの言葉からもわかる。

つまり、同一性の観念を見出すためには、対象が単一性と数多性という二つの性質を持ち、かつ単一の対象から別個のものが見出せなくてはならないということになる。

## 2 存在するものと存在の観念が同一であるとする論証

ヒュームが存在の観念について唯一論じているのは、T, 1.2.6, pp. 84–85「存在及び外的存在の観念について」においてである。そこでは、以下のような議論が提示されているように思われる。

まず、我々が意識や記憶するすべての観念は例外なく存在していると考えられる。この時点で、このすべての存在するものから、我々は「有ること」の明瞭な観念を抱く、つまり何かがあるということはどういうことかを知覚する。以上より、存在の観念は二通りの仕方ではありえないように思われる。すなわち、存在の観念はすべての個々のものに結びつくか、それがすべての個々のものと同一かのいずれかの仕方である。ヒュームは後者のオプションを取る。ヒュームによれば、存在の観念すなわち「有ること」の観念は単体では像を結ばれえず、そして、量や性質によって正確にあらわせるような像が結ばれない観念は成立しない。（この主張は例えばヒュームの次の言に見てとれる：「精神は、量または性質の各々の度合いの正確な考え（観念）を形成せずには、或る量または性質の考え（観念）を形成することが出来ない」（T, 1.1.7, p. 30）。）したがって、存在の観念はそれ単体では成立しえない。また一方で、存在しない観念を想定することもできないため、存在するものから存在することを分離することはできない。しかし、単体で成立しないものは想定しえない。従って、自然に後者、すなわち存在の観念はすべてのものと同じである、ということになる。

存在の観念と存在するものが同一であることを示すには、第一に、前述の同一性についての前提より、この二つの呼び名で示される対象が複数である場合と一つである場合を示せばよい。とすると、複数である場合は、それぞれ、あるものを存在することを示すものとして思い浮かべることに、個別の具体的なものとして思い浮かべることがあるということが挙げられる。そして、分割できないものは一つであるためここでは一つのものしかありえない。よって、これら二つは同一であると結論できる。

ヒューム自身が同一性として実際に挙げている例は、物体を観察し続けたときに変化がないことを観測したうえで、その時間内から二つの地点での物体を取り出すことでその同一性を確認する、ということである。一方、今問われている存在の場合は、まず観念の抱き方は単一のものではありえないとしたうえで、二つの呼び名は実は同じものを指すという流れで同一が示される。

## 3 ヒュームの議論に対して考えられる二つの反論

第2節で述べたヒュームの議論には二つの反論が提起されうる。

第一の反論は次のものである：まず、存在するものの中で二つのものをそれぞれ  $P, Q$  とおく。このとき、存在の観念と個々の存在するものが同一であるならば、 $P = \text{存在の観念}$  かつ  $Q = \text{存在の観念}$  が成り立つはずである。そうであるならば、「 $=$ 」には推移律 ( $A = B$  かつ  $B = C$  ならば  $A = C$ ) が成り立つから、 $P = Q$  ということになってしまうように思われる。しかし、個々の存在するものが互いに別個であるということは明白なので、このような結論は受け入れがたい。

第二の反論は次のものである：存在の観念というものを考えてみたときに、存在するもの  $P$  のみからは、存在すること一般ということとはやはり示されることはないように思われる。ここで、存在するもの  $P$  を観察するときに我々が見て取れるのは、存在するもの  $P$  が存在することのみであると考えることが自然である。よって、個別のものを観察することから一般的にあるものが存在するとはどういうことか、ということがわかるというにはいささか飛躍があるように思われるのである。つまり、個別の存在するものについて考えるだけでは、「個別のものが存在すること」しか考えられず、一般的に「有ること」自体の観念には及ばないのではないだろうか。また、個別のものから一般的な観念に及ぶような場合が考えられるとしても、そのような働きをする原理を説明する必要も出てくるだろう。

#### 4 ヒュームの議論の整合的な説明

本節では、先の二つの反論に抗して、ヒュームの議論を整合的に理解する道を探る。

4-1 では、前述の二つの反論に対して容易に思いつかれるであろう応答を検討し、それらが不十分であることを示す。

4-2 では、4-3 の論証において使用される二つの要素について分析を加える。二つの要素とは、存在の観念と一般観念である。

4-3 では、4-2 の成果に基づき、ヒュームの議論を整合的に説明することを目指す。

##### 4-1 反論への考え得るいくつかの応答

第一の反論には、まず、次のように応答できるように思われる：存在の観念を存在するものそれぞれのみに於いて成り立つものと考えことにしよう。そうすると、存在するもの  $P = P$  の存在の観念、存在するもの  $Q = Q$  の存在の観念となるが、 $P$  の存在の観念  $\neq Q$  の存在の観念であるから、 $P = Q$  にはならない。

このように考えると、存在するすべてのものが同一となる、ということは避けられるように思われる。そしてこう考えれば、二つ目の反論は初めから生じないことになる。この場合、ヒュームが論じていることは、あくまで個別の存在するものとその当のものの存在

の観念のみの同一性であって、個別に存在するものとすべての存在において適用される一般的存在観念は同一にならないと考えられるのである。

しかし、この応答は、存在の観念という一つの名称であらわされたものが、実際は個々の存在するものについては異なったものとしてしまう、という難点をもつ。ヒュームもまた、存在の観念を、存在するということの観念として、特に個々の存在に限定することなく使っており、上の応答はこのことに整合しない。(次を参照：「われわれが意識あるいは記憶しているいかなる種類の印象であれ観念であれ、存在していると考えられていないものはない。そして明らかに、この意識から有ること（存在）のもっとも完全な観念と確信が生じるのである」(T, 1.2.6, p. 84)。) こうなると、もはや存在の観念を個別に分割して考えることはできない。

次に、第二の反論のみに応答しようとする次の議論を考えよう：任意の存在するものが存在しているという点で存在するものPに類似しているという理由で、個別に存在するものPから任意の存在するものを想定してみよう。類似によって別の観念が想起されるとしてよいのは、ヒュームの議論において類似がそのような働きを持つとされているからである (T, 1.1.4, pp. 22-23)。ところで、この任意の存在するものは、それが存在するものの中から任意に取り出されるものであるため、Pを含む存在するものの集合としても想定される。このような集合は、もはや存在するものPだけではなく存在するという性質を持つものすべてを示すため、一般的に存在することを示しうる。よって、個別に存在するものから任意の存在するものを想定できるならば、個別に存在するものから、一般的に存在することが示されうるということになるのではないだろうか。

しかし、任意の存在するもの及び存在するものの集合とはどのように想定されるのだろうか。ヒュームの議論では、前述の通り、量と程度の決まっていない観念は想定されえないため、それら自体を観念として想定するのは不可能であると考えられるしかない。ヒュームの議論の中では、存在するものや存在するものの集合についてはその要素の条件として、存在すること以外の要件は定められていないため、具体的に「存在する」という性質を持つ個別のものとしてしか語られえない。ヒュームの議論においては、抽象的な観念を示す個別のものは一般観念の説明のなかに現れるが、上述の反論への応答は、存在の観念が一般観念に当たるかどうかについて解明する前に存在を一般観念としてしまっているの、論点先取となってしまう。このことを明らかにするために、次項では一般観念について考察することにしよう。

#### 4-2 存在の観念の分析と一般観念の解明

4-2-1 では、4-1 での応答が失敗したことを受けて、その原因を探る。具体的には失敗の原因は存在の観念についての分析不足と考え、次の課題をその分析とする。分析を始

めるとすぐに、存在の観念はまず、存在することを我々に示す観念であるということがわかる。また、存在の観念は一般的に当てはまるという類の観念であると思われるので、まずは一般的な観念についての説明が必要であると考えられる。4-2-2では、4-2-1で課題となった一般的な観念についての説明を行う。本論文の目的のために特に必要なことは、存在の観念が一般的な観念として成り立つかどうかと、また成り立った場合にどのようなことになるかということである。よって、一般的な観念となる条件と大まかに一般的な観念がどのようなものであるかについて説明する。

#### 4-2-1 存在の観念の分析と一般観念の解明の必要性

この論文ではこれまで、「存在するものと存在の観念は同一である」という命題において、ほとんど同一であることについてのみに着目した議論を行ってきた。同一という意味に沿うように存在するものと存在の観念について解釈を行ってきたのである。しかし、これがうまくいかなかったのは前述の応答の失敗から明らかである。

別の解決案を探すべく、私は、「存在するものと存在の観念は同一である」という命題の分析に立ちかえることを提案する。ここで、この命題には「存在するもの」、「存在の観念」、「同一」の三つの要素が含まれている。まず、同一性の説明は既に行ったためここでは問題としない。また、存在するものというものは、我々が知覚するすべてのものということでは既に明らかであるように思われる。よってここで、まず問題とすべきは存在の観念であることになる。

存在の観念について分析を行ってみると、第一に前述した通り、存在の観念とは「有ること」の明確な観念、つまり「有ること」とはどういうことなのか、ということを我々に示すものである。よって、この論文で解明しようとしている、「存在するものと存在の観念は同一である」ということは、存在するものと一般的に「有ること」を我々に示す観念が同じであるということに他ならない。しかし、存在の観念についてはこれだけの分析では不十分であると思われる。というのも、応答の部分でも問題になったように、存在の観念は一般的な観念であり、一般的な観念についての分析が不十分であるように思われるからである。

よって、応答の失敗の原因は、この一般的な観念にあると見て、次の4-2-2では一般的な観念についての説明を行う。

差し当たって、何か一般化された観念を指すものとしては一般観念というものがヒューム自身によってT, 1.1.7, pp. 29-37で挙げられている。ここで、個々の観念が「有ること」を示すようになる、と論じるためには、個々の観念の一般化が必要であるように思われるため、「有ること」の観念を一般観念の事例に当てはめて考えてみたい。そのため、ここでヒュームの一般観念についての説明が必要となる。



#### 4-2-2 一般観念

ここで、一般観念についての説明が重要となるのは、存在の一般観念と個別に存在するものの存在の観念が、一般観念と個別的観念の定式に当てはめることができれば、ヒュームの議論に新たな説明を加えることが可能になると思われるということによる。よって、この項では、一般観念について説明するが、それがどのような条件下で成立するか、そしてその場合どのような結果を引き起こすかを理解できるようになれば充分であり、詳細な内容の説明は不要である。そのような理解ができるようにするために、まず、一般観念の大まかな内容を説明し、その上でどのような条件下でそれが成立するかを明らかにしていく。

ここでの一般観念とは、抽象観念とも言われる。まずヒュームは次のように述べる：「確かなことは、われわれが一般名辞を用いるとき、常に個物の観念を形成するということができないということ、そして、残りの個物は、そのときの事情が必要とするならばいつでもわれわれをしてそれらと呼び起こさせるところの、習慣によって、代表されているだけであるということ、である。それゆえ、これが抽象観念および一般観念の本性であり、このような仕方では、「或る種の観念（抽象観念）は、その本性においては個別的であるが、その代表の働きにおいては一般的である」という、先の逆説が説明されるのである」（T, 1.1.7, p. 35）。引用の二番目の文冒頭の「それゆえ、これが抽象観念および～」における「これ」とは前の文章を指していると思われるので、前の文章こそが、「抽象観念および一般観念の本性」ということになる。この引用について以下で説明しよう。

例えば、「三角形」という名辞を考えた場合、それに結び付けられているのは、形のあつた個々の三角形の観念である。そして、「三角形」という名辞が出された時には、その名辞と結びつくいくらかの個別的な三角形の観念が現れる。また、このように名辞と結びつく個別的な三角形の観念が現れるが、すべての個別的な三角形の観念が現れるわけではない。そして、現れた三角形の観念は、習慣によって選別されて、現れなかった個別的な三角形の観念の代表となったものであるといえる。

ここで、混同してしまうと問題がありそうな一般名辞と一般観念について説明を加えたい。ヒュームは次のように述べている：「一つの個別的な観念が一般的となるのは、それが一つの一般名辞に結びつけられることによる。すなわち、習慣的随伴によって他の多くの個別的観念と結びついておりそれらを容易に想像力に呼び起こすような名辞に、結びつけられることによるのである」（T, 1.1.7, p. 35）。

これを言い換えると、一般観念そのものは、一般名辞に結びついて一般的になった個別的観念であり、一般名辞とはそれに伴う習慣によって多くの個別的観念と結びついて想像力をしてそれらの個別的観念を呼び起こさせるものということになる。「習慣的随伴」と

いう言葉は一見不明瞭だが、「一般名辞すなわち抽象観念によって呼び起こされた随伴する習慣が～」(T, 1.1.7, p. 34) という記述が前に述べられているので、その言い換えと考えられる。

習慣については、ここでは発動される条件と発動された結果のみを述べるだけで十分であろう。というのも、存在の観念を一般観念に当てはめて作用するかのみを考えるのがまずは求められることであり、そのことにおいて、習慣の内容についての詳細な吟味は必要がないからである。

さて、ヒュームは次のように述べている：「われわれは、われわれにしばしば現われる対象の間に一つの類似性を見出すと、対象の量と性質の度合いにいかなる相違が認められようと、またほかにどのような相違が現われようと、対象のすべてに同一の名称を適用する。われわれがこの種の習慣を獲得したのちには、その名称を開けば、それらの対象のうちの一つの観念が呼び起こされ、想像力はその対象を、そのすべての特定の条件や比率とともに思い浮かべるのである」(T, 1.1.7, pp. 32-33)。

これは、三角形という名辞の場合、二等辺三角形、正三角形、直角三角形と見ていて、三つの角がある図形という類似点を見つけると、三角形という名辞をあてるということになる。そして、三角形という名辞を出したときにその中のうちのどれか一つが現れるようにするのである。そしてここでは、三角形という名辞が前述の一般名辞となっていることがわかる。

よって、習慣を得る条件は、いくつかの対象の間に類似性を見つけて同一の名辞を与えることであり、習慣が発動すると、その名称から差しあたって一つの個別的観念が現れるのである。

以上の考察の成果は次のようにまとめられる：個物を見て個物同士の類似性が見つかり、それに同一の名辞をつけられる場合において、個別の観念は一般的となり、その名辞を出したときに名辞を付けた個物の観念のうちいくらかを表示することになる。

#### 4-3 一般観念を使って存在しているものと存在の観念が同一であることを明らかにする

ここで、存在の一般観念について考えてみると、個々の存在するものと存在の一般観念の関係は、個別観念と一般観念の関係に当てはめて理解できる。

というのも、個々の存在するものは存在しているという点で、互いに類似していると考えることができ、したがって、前述の条件を満たし、一般観念としての存在するものを想定することができるからである。また、三角形についても同様のことが言えることは明らかであるので、個別の存在観念と存在の一般観念とは、個別の三角形の観念と三角形一般の観念の関係と同様に考えられる。

ところで本論文では今まで、ある一つの対象について存在するものと存在の観念を考え



てきた。というのも、いくつかの個物（個別の観念）を調べると、新しい種類の観念を規定できるなどということが知られていなかったため、問題となる対象が一つでも複数でも結局は一つずつ考えるしかなかったからである。言い換えれば、個物同士の関係を考える必要がなかったため、個々の存在と個物の関係について考えるのみでよく、問題となる対象が複数でも任意の一つの対象を取り出してそれについて考えるのみでよかったのである。しかし、ここで個物が複数と考えられることによって大きな変化が生じることとなる。すなわち、ヒュームは「存在の観念は、存在しているとわれわれが思念する（思い浮かべる）もの（対象）の観念と、まさに同一物であることになる」（T, 1.2.6, p. 85）と述べているが、「存在していると我々が思い浮かべるもの」が複数個考えられることで、これまで対象は一つという前提で考えられた問題点が払拭されるのである。

存在する対象から類似点を見つけ、存在の一般観念を導出する。前述の通り、すべての対象は存在しているものという点で類似しているため、すべての対象を「有るもの」という名辞に結びつけることができる。こうして、存在の一般観念が導出される。

さて、前述の通り、一般観念とは名辞を結びつけられた個別観念でしかない。このことから一般観念は、個別観念の類似した性質を受け継ぐということが帰結し、さらにそこから個々の存在するものの観念は「有ること」を示す観念、すなわち存在の観念と呼ぶことができるということが導かれる。これについて以下で論証する。

存在するものの類似点を見つけて成立した一般観念は、存在するものの一般観念である。存在するものの一般観念は一般的な「有ること」を示す観念であるので、存在するものの一般観念は、「有ること」の観念、すなわち存在の観念でもある。しかし、存在するものの一般観念は、「有ること」を示す唯一の観念ではないと考えられる。というのも、存在するものの一般観念が成り立つには、個々の存在するものの類似点によって生み出される名辞が不可欠であるため、個々の存在するものにも「有ること」という性質が含まれていると想定することが可能だからである。一般観念において、名辞は一般的であり、個々の観念の類似点から成り立つのは、一般観念の項で説明した通りである。「有るもの」という名辞は、個々の存在するものの性質を持つ類似点、すなわち「有ること」から成立するため、個々の存在するものも「有ること」の性質を持っているということが想定できるということになる。

ここで、存在の観念は「有ること」を示すもの、すなわち存在するという性質を示すものであるから、逆に、存在するという性質を持っているものは存在の観念と呼ぶことができる。上で確認されたように、個々の存在するものも「有ること」という性質、すなわち存在という性質を持つため、個々の存在するものも存在の観念と呼ぶことができる。

個々の存在するものを存在の観念と呼ぶことができるということについての論証は以上でなされた。次に、このことから、「存在するものと存在の観念は同一である」という結

論に至る考え方を論じる。

これまでの議論で、個々の存在するものは二つの側面で表せることがわかった。二つの側面とは、具体的な個的に存在するものとしての側面と、一般的に存在することを表す、存在の観念としての側面である。ところで、単一の対象から複数の側面が見いだされる場合、本論文の第一節で語られた同一性の条件を満たすため、複数である側面は同一になる。同一性の条件とは、単一性と数多性を併せ持つこと、単一の対象から数多性を示すことの二つである。個々の存在するものの場合は、存在するものは別個ではない単一の対象であるということから単一性が確保され、また、それは複数である側面を持つということから数多性が確保される。加えて、個々の存在するものの場合は、単一の対象に複数である側面が見いだされることが明らかになっているため、単一の対象から数多性を示すという条件も満たしていると言える。ここで、同一性の原理において、同じとされるのは複数である側面のそれぞれであり、ここでは複数である側面とは個々の存在するものとしての側面と存在の観念としての側面である。従って、個々の存在するものと存在の観念は同一であると考えることができる。

このように説明をしても、前述した第一の反論が依然として残るように思われる。すなわち、個別の存在するものそれぞれが一般的に存在することの観念と同一なら、個別の存在するもの同士も同一になってしまうのではないか、ということである。しかし、この反論に対しては、一般観念の別の例を出すことで容易に応答できる。というのも、この反論は一般観念全体において同様に適用されるので、一般観念において一つでも当てはまらない例を見つければ反論として成立していないと言えるからである。

ここでは例として三角形を挙げる。三角形の観念は、個別に存在する諸々の三角形の観念から三角形性という類似点を取り出した一般観念である。存在の場合と同じように、個別の三角形それぞれが三角形一般の代表として用いられうる、すなわち、三角形一般の観念として機能しうる。しかし、明らかに、三角形性という類似点を持つとはいえ、異なる三角形が同一となることはない。このように、一般観念において当てはまらない例を見つけることによって、前述した第一の反論は成立せず、その反論は本論文におけるヒュームの議論についての説明の整合性を失わせる効力を持たないということが帰結する。

最後に、最も直観的に納得しがたいことは、個々の存在するものと存在するということの観念が同一になってしまうのではないか、ということだと思われる。

この議論がなぜ直観に反してしまうのだが、その理由はおそらく、同一性を示す前の部分、すなわちすべての対象の中に共通する「有ること」ということがあり、それが対象と別個にならないという結論の内にあると思われる。というのも、ヒュームによると別個である観念同士は今まで切り離せると考えられてきたにもかかわらず、この議論の中では個々の存在するものの観念の中に存在の観念があり、それらは切り離せないからである。

しかし、以下の文章により、ヒュームは、対象の中にはその対象とは分離できない性質があると考えている、ということがわかる：「異なる単純観念でさえたがいに類似し得ることは、明らかである。しかも、それらの類似点は、それらの相違点から、必ずしも別個でも分離できるのでもない。〔中略〕さらに、このことは「単純観念」という抽象名辞そのものからも、確かめることができる。すなわち、この名辞は、その意味範囲に、すべての単純観念を含んでいる。これらの単純観念は、単純性においてたがいに類似する。しかるに、あらゆる複合を排除する単純観念の本性により、〔単純性という〕この類似点は、他の点から、区別も分離もできないのである」(T, 1.1.7, p. 32 原注；補足は引用者による)。ここでの諸々の単純観念における単純性は、属する観念から別個にならない性質として語られている。よって、同様に、個々の存在するものにおける存在という性質も、属する観念から別個にならない性質として語られていても何ら不自然なことはないのである。

このように、存在するものと存在の観念が同一である、とするヒュームの議論は、同一性や一般観念についてのヒュームの考えに従えば、整合的に説明ができるということが示された。

#### 参考文献

デイヴィッド・ヒューム著 木曾好能訳 (1739-1740/1995) 『人間本性論 第一巻 知性について』法政大学出版局。

